

◎指示があるまで開かないこと。

(平成 27 年 2 月 9 日 14 時 40 分 ~ 17 時 00 分)

注 意 事 項

1. 試験問題の数は 80 問で解答時間は正味 2 時間 20 分である。
2. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) (例 1)、(例 2) の問題では a から e までの 5 つの選択肢があるので、そのうち質問に適した選択肢を(例 1)では 1 つ、(例 2)では 2 つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例 1)の質問には 2 つ以上解答した場合は誤りとする。(例 2)の質問には 1 つ又は 3 つ以上解答した場合は誤りとする。

- | | |
|--|--|
| <p>(例 1) 101 応招義務を規定しているのはどれか。</p> <p>a 刑法</p> <p>b 医療法</p> <p>c 医師法</p> <p>d 健康保険法</p> <p>e 地域保健法</p> | <p>(例 2) 102 医師法で医師の義務とされているのはどれか。2 つ選べ。</p> <p>a 守秘義務</p> <p>b 応招義務</p> <p>c 診療情報の提供</p> <p>d 医業従事地の届出</p> <p>e 医療提供時の適切な説明</p> |
|--|--|

(例 1) の正解は「c」であるから答案用紙の **(c)** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

101	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
			↓		
101	(a)	(b)	●	(d)	(e)

答案用紙②の場合、

101		101
(a)		(a)
(b)		(b)
(c)	→	●
(d)		(d)
(e)		(e)

(例 2) の正解は「b」と「d」であるから答案用紙の **(b)** と **(d)** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

102	(a)	(b)	(c)	(d)	(e)
			↓		
102	(a)	●	(c)	●	(e)

答案用紙②の場合、

102		102
(a)		(a)
(b)		●
(c)	→	(c)
(d)		●
(e)		(e)

(2) (例3) では質問に適した選択肢を3つ選び答案用紙に記入すること。なお、(例3) の質問には2つ以下又は4つ以上解答した場合は誤りとする。

(例3) 103 医師法に規定されているのはどれか。3つ選べ。

- a 医師の行政処分
- b 広告可能な診療科
- c 不正受験者の措置
- d へき地で勤務する義務
- e 臨床研修を受ける義務

(例3) の正解は「a」と「c」と「e」であるから答案用紙の **(a)** と **(c)** と **(e)** をマークすればよい。

答案用紙①の場合、

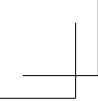
103	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e
103	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/> b	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/> d	<input checked="" type="radio"/>

↓

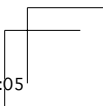
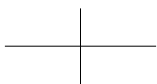
答案用紙②の場合、

103	103
<input type="radio"/> a	<input checked="" type="radio"/>
<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> b
<input type="radio"/> c	<input checked="" type="radio"/>
<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> d
<input type="radio"/> e	<input checked="" type="radio"/>

→

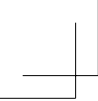


TP01doc-Ior-3

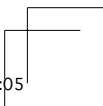
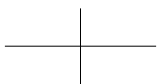


TP01doc-Ior-4

TP01doc-Ior-5



TP01doc-Ior-6



- 1 新生児呼吸窮迫症候群の初期治療で適切なのはどれか。
 - a 一酸化窒素吸入
 - b 気管支拡張薬吸入
 - c 肺サーファクタント気管内注入
 - d 抗菌薬静注
 - e プロスタグランディン E₁ 持続静注

- 2 アルコール依存症の離脱症状でないのはどれか。
 - a 幻 視
 - b 興 奮
 - c 作 話
 - d 振 戦
 - e 発 汗

- 3 ストレスが発症の原因となり、それが消失すると一定期間内に症状が消失するのはどれか。
 - a 適応障害
 - b 心気障害
 - c パニック障害
 - d 社交不安障害
 - e 心的外傷後ストレス障害

- 4 食物摂取 15 分後にショックを起こした患者の原因検索に有用なのはどれか。
- a パッチテスト
 - b 皮膚感作試験
 - c プリックテスト
 - d リンパ球刺激試験
 - e 特異的 IgG の検出
- 5 黄色ブドウ球菌が産生する表皮剝脱毒素(exfoliative toxin)によって生じる疾患はどれか。
- a 伝染性膿痂疹
 - b 壊疽性膿皮症
 - c 尋常性痤瘡
 - d 皮膚腺病
 - e 丹毒
- 6 耳痛を訴える 2 歳 9 か月の男児の鼓膜の写真(別冊 No. 1)を別に示す。投与すべき抗菌薬はどれか。
- a ペニシリン系
 - b マクロライド系
 - c ニューキノロン系
 - d テトラサイクリン系
 - e アミノグリコシド系

別冊
No. 1

- 7 肺炎と抗菌薬の組合せで正しいのはどれか。
- a 市中肺炎 ————— グリコペプチド系
 - b 院内肺炎 ————— テトラサイクリン系
 - c 非定型肺炎 ————— アミノグリコシド系
 - d 特発性器質化肺炎 ————— ニューキノロン系
 - e 人工呼吸器関連肺炎 ————— カルバペネム系
- 8 本態性高血圧患者における家庭血圧の測定について正しいのはどれか。
- a 手首での測定を推奨する。
 - b 早朝高血圧の診断に有用である。
 - c 150/90 mmHg 以上を高血圧の基準とする。
 - d 患者の服薬アドヒアランスには影響しない。
 - e 予後の予測には診察室血圧の方が優れている。
- 9 緊急手術の適応とならないのはどれか。
- a 左心室瘤
 - b 乳頭筋断裂
 - c 心室中隔穿孔
 - d 左室自由壁破裂
 - e 左冠動脈主幹部病変による不安定狭心症

10 Stanford B型急性大動脈解離の合併症として可能性が最も低いのはどれか。

- a 血 胸
- b 腎不全
- c 下肢虚血
- d 腸管壊死
- e 急性心筋梗塞

11 上部消化管内視鏡像(別冊 No. 2)を別に示す。

診断はどれか。

- a 食道平滑筋腫
- b 逆流性食道炎
- c 食道静脈瘤
- d 進行食道癌
- e 食道憩室

別 冊

No. 2

12 人間ドックによる大腸がん検診の下部消化管内視鏡像(別冊 No. 3)を別に示す。

自覚症状はない。

対応として適切なのはどれか。

- a 経過観察
- b 抗菌薬投与
- c 生 検
- d 大腸全摘術
- e 粘膜切除術

別 冊

No. 3

13 消化管疾患とその合併症の組合せで誤っているのはどれか。

- a Crohn 病 ————— 痔 瘻
- b 偽膜性腸炎 ————— 肝膿瘍
- c Meckel 憩室 ————— イレウス
- d 潰瘍性大腸炎 ————— 中毒性巨大結腸症
- e 虚血性大腸炎 ————— 大腸穿孔

14 肝右葉切除の適応が制限される検査値はどれか。

- a 血小板 12 万
- b アルブミン 3.6 g/dL
- c 総ビリルビン 1.2 mg/dL
- d ICG 試験(15 分値) 38 % (基準 10 以下)
- e プロトロンビン時間 75 % (基準 80~120)

- 15 胆管癌のリスクファクターでないのはどれか。
- a 肝内結石症
 - b 先天性胆道拡張症
 - c 膵・胆管合流異常症
 - d 原発性硬化性胆管炎
 - e 原発性胆汁性肝硬変
- 16 膵腫瘍と画像所見の組合せで正しいのはどれか。
- a 腺房細胞癌 ————— 乏血性腫瘍
 - b 膵仮性嚢胞 ————— 血管に富む腫瘍
 - c 漿液性嚢胞腫瘍 ————— 大きな嚢胞腔
 - d 粘液性嚢胞腫瘍 ————— 小嚢胞の集簇
 - e 膵管内乳頭粘液性腫瘍 ————— 膵管拡張
- 17 慢性期の慢性骨髄性白血病に対してまず行うべき治療はどれか。
- a 多剤併用化学療法
 - b 自家造血幹細胞移植
 - c 同種造血幹細胞移植
 - d インターフェロン投与
 - e チロシンキナーゼ阻害薬投与

18 粘膜刺激症状を呈する有毒ガスはどれか。

- a サリン
- b ブタン
- c 亜硫酸ガス
- d 一酸化炭素
- e シアン化水素

19 女性生殖器から細胞診の検体を採取するために用いる器具の写真(別冊 No. 4)を別に示す。

これらの器具を用いて検査する共通の部位はどれか。

- a 卵 巣
- b 卵 管
- c 子宮体部
- d 子宮頸部
- e 膣

別 冊
No. 4

20 不育症の原因として考えにくいのはどれか。

- a 子宮奇形
- b 月経前症候群
- c 甲状腺機能低下症
- d 染色体均衡型転座
- e 抗リン脂質抗体症候群

21 脳梗塞に対してt-PA〈tissue plasminogen activator〉による血栓溶解療法を行う際に、事前に確認する**必要がない**のはどれか。

- a 血小板数
- b 頭部単純 CT
- c 動脈血ガス分析
- d 頭蓋内出血の既往歴
- e PT-INR〈prothrombin time-international normalized ratio〉

22 軽微な外傷による複数回の四肢の骨折歴があり、難聴を伴う 18 歳男子の眼の写真(別冊 No. 5)を別に示す。

診断として最も考えられるのはどれか。

- a 先端巨大症
- b 大理石骨病
- c 軟骨無形成症
- d 骨形成不全症
- e 原発性骨粗鬆症

別 冊

No. 5

23 3か月児の股関節エックス線写真の正面像(別冊 No. 6)を別に示す。

診断として正しいのはどれか。

- a Perthes 病
- b 骨端線離開
- c 単純性股関節炎
- d 大腿骨頭すべり症
- e 發育性股関節形成不全

別 冊

No. 6

24 頭部外傷患者の受傷後4時間の頭部単純CT(別冊 No. 7)を別に示す。

出血源として最も考えられるのはどれか。

- a 架橋静脈
- b 後大脳動脈
- c 中大脳動脈
- d 中硬膜動脈
- e 上矢状静脈洞

別 冊

No. 7

25 治療薬と疾患の組合せで誤っているのはどれか。

- a GnRH アゴニスト ————— 子宮筋腫
- b カルシトニン製剤 ————— 高カルシウム血症
- c 副甲状腺ホルモン<PTH>製剤 ————— 骨粗鬆症
- d デスマプレシン<DDAVP>製剤 ————— 高血圧症
- e グルカゴン類似ペプチド1<GLP-1>製剤 ————— 糖尿病

26 糖尿病の患者で毎日のウォーキングを積極的に勧めてよいのはどれか。

- a 肥満で、膝関節痛を伴う。
- b 体重減少があり、尿ケトン体が陽性である。
- c 視力低下を訴え、増殖糖尿病網膜症を認める。
- d 両下腿に浮腫が著明で、蛋白尿(3.5 g/日)を認める。
- e 間欠性跛行を主訴とし、右足背動脈の触知が不良である。

27 Down 症候群で合併しやすい内分泌疾患はどれか。

- a 尿崩症
- b クレチン症
- c Basedow 病
- d Cushing 症候群
- e 原発性アルドステロン症

- 28 小児期の皮膚筋炎で正しいのはどれか。
- a 男児に多い。
 - b 悪性腫瘍の合併が多い。
 - c 死因は横紋筋融解症が多い。
 - d 診断には MRI が有用である。
 - e 抗 Jo-1 抗体は半数の患者に陽性を示す。
- 29 血管炎に特異性の高い徴候はどれか。
- a 弛張熱
 - b 結節性紅斑
 - c 爪下線状出血
 - d 多発単神経炎
 - e 早朝の呼吸困難
- 30 マイコプラズマ肺炎で正しいのはどれか。
- a 重症肺炎が多い。
 - b 50 歳代に最も多い。
 - c 比較的徐脈を呈することが多い。
 - d Gram 染色で陰性桿菌が観察される。
 - e マクロライド系抗菌薬耐性株が 5 年前と比較して増加している。

- 31 食中毒の原因となるのはどれか。
- a たらの芽
 - b 青いトマト
 - c 芽キャベツ
 - d 発芽した大豆
 - e ジャガイモの新芽
- 32 飲酒について正しいのはどれか。
- a 我が国のアルコール消費量は近年、増加傾向を示している。
 - b 適度な飲酒の量は純アルコールで1日平均40gとされている。
 - c 飲酒開始年齢とアルコール依存症の発症リスクとは関係がない。
 - d 女性は男性と比較してアルコールによる臓器障害を起こしやすい。
 - e 1日平均飲酒量が増えるとともに虚血性心疾患の罹患率は直線的に上昇する。
- 33 播種性血管内凝固(DIC)で見られるのはどれか。2つ選べ。
- a PT 延長
 - b APTT 延長
 - c 血小板増加
 - d 赤血球増加
 - e 白血球減少

34 糖尿病網膜症の初期からみられる所見はどれか。2つ選べ。

- a 軟性白斑
- b 網膜出血
- c 硝子体出血
- d 毛細血管瘤
- e 網膜新生血管

35 房室弁の先天異常を伴う心疾患はどれか。2つ選べ。

- a 総動脈幹症
- b Ebstein 奇形
- c 心内膜床欠損症
- d 心室中隔欠損症
- e 完全大血管転位症

36 大動脈弁閉鎖不全症の進行を示唆する徴候はどれか。2つ選べ。

- a 脈圧の減少
- b 狭心痛の出現
- c 爪床血管拍動の消失
- d 拡張期心雑音の高調化
- e 心尖拍動の左下方への偏位

37 上腸間膜動脈閉塞症の原因となるのはどれか。2つ選べ。

- a 肝硬変
- b 心房細動
- c 慢性膵炎
- d 動脈硬化症
- e 習慣性便秘症

38 頸部リンパ節生検組織の H-E 染色標本(別冊 No. 8A、B)を別に示す。染色体検査では t(14;18)転座が認められた。

腫瘍細胞に発現している可能性が高いのはどれか。2つ選べ。

- a CD3
- b CD4
- c CD8
- d CD10
- e CD20

別 冊
No. 8 A、B

39 更年期障害に対するホルモン補充療法の禁忌はどれか。2つ選べ。

- a 乳 癌
- b うつ病
- c 骨粗鬆症
- d 脂質異常症
- e 深部静脈血栓症

40 片頭痛で正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 男性に多い。
- b 入眠中に多い。
- c 拍動性の痛みが多い。
- d セロトニンが関与する。
- e 発作予防にトリプタンを用いる。

41 31歳の初産婦。妊娠33週2日。切迫早産と診断され妊娠28週から入院中である。「数時間前から少しずつおなかが痛くなってきて、赤ちゃんの動きが少ない」との訴えがあり診察した。陰鏡診で分泌物は褐色少量。内診で子宮口は閉鎖している。胎児心拍数陣痛図で頻回の子宮収縮と遅発一過性徐脈を認め、胎児機能不全と診断し緊急帝王切開を行った。帝王切開時、羊水は血性で胎盤母体面に凝血塊を伴っていた。児娩出後の子宮の写真(別冊 No. 9)を別に示す。

胎児機能不全の原因として最も考えられるのはどれか。

- a 臍帯断裂
- b 子宮破裂
- c 前置胎盤
- d 絨毛膜羊膜炎
- e 常位胎盤早期剝離

別冊
No. 9

42 29歳の初妊婦。妊娠35週。胎動減少を主訴に来院した。妊娠34週まで特に異常を指摘されていない。数日前から胎動が少ないような気がするため受診した。腹痛の自覚はない。身長162cm、体重64kg(非妊時57kg)。体温36.5℃。脈拍84/分、整。血圧120/78mmHg。子宮底長32cm、腹囲87cm。下腿に浮腫を認めない。ノンストレステスト(NST)実施時の胎児心拍数陣痛図(別冊No.10)を別に示す。

今後の方針として適切なのはどれか。

- a 帰宅させる。
- b 分娩誘発を行う。
- c 帝王切開を行う。
- d 臍帯穿刺により胎児血液検査を行う。
- e BPS(biophysical profile score)を評価する。

別冊

No. 10

43 61歳の女性。無表情、無関心で元気がなくなったことを心配した家族に伴われて来院した。半年前から毎日、同じ時間に寝て起き、必ず同じ経路を散歩し、同じ料理しか作らず、他の家事をしなくなってきた。夫が注意しても平気な態度を示す。夫は「些細なことで急に怒り出すこともあって、人が変わってしまったようだ」と言う。診察室に入った途端に、自分では困ったことはないと言わんとす。問題行動についての質問には返答しない。明らかな記銘力の低下を認めない。神経学的所見を含め身体所見に異常を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 強迫性障害
- b 脳血管性認知症
- c 前頭側頭型認知症
- d Lewy小体型認知症
- e Alzheimer型認知症

44 15歳の男子。夜間の異常行動を主訴に母親とともに来院した。2週前、午前1時ころ患者の部屋で大きな音がしたため母親が確認に行くと、患者がうつろな眼差しで部屋の中を歩いており、目覚まし時計が床に転がっていた。手をつかもうとすると急に暴れ始め抑え切れなかったため父親を呼びに行き、部屋に戻るとベッドの中で寝ていた。翌日に確認すると「夜の10時半ころから朝までぐっすり寝ていた」と述べ、昨夜の出来事を全く覚えていなかった。昨晚も同様の状態がみられたため受診した。身体所見、血液生化学所見および脳波所見に異常を認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 夜驚症
- b 悪夢障害
- c 夢中遊行症
- d レム〈REM〉睡眠行動障害
- e 睡眠覚醒スケジュール障害

45 79歳の女性。左内眼角部の腫脹を主訴に来院した。1週間前から腫脹と発赤とが徐々に増強し痛みも強くなってきたため受診した。顔面の写真(別冊 No. 11)を別に示す。

まず行うべき検査はどれか。

- a 組織診
- b 涙液培養
- c 眼窩部CT
- d 超音波検査
- e フレアセルフオートメトリ

別冊
No. 11

46 45歳の男性。左眼の視力低下を主訴に来院した。1か月前から左眼で中心が見にくく、物が小さく見えるようになった。矯正視力は右1.2、左0.9。左眼の眼底写真(別冊 No. 12A)、蛍光眼底造影写真(別冊 No. 12B)及び光干渉断層計(OCT)の結果(別冊 No. 12C)を別に示す。

この疾患について正しいのはどれか。

- a 遠視化する。
- b 遺伝性である。
- c 虹彩炎を伴う。
- d 眼圧が高くなる。
- e 新生血管を認める。

別 冊
No. 12 A、B、C

47 60歳の男性。舌の痛みを主訴に来院した。3か月前から舌右縁から口腔底にかけて疼痛が続いており改善しないため受診した。疼痛の部位に粘膜不整を認め、生検で扁平上皮癌の病理診断であった。頸部リンパ節転移や遠隔転移を認めない。口腔内の写真(別冊 No. 13A、B)、頭頸部造影MRIの脂肪抑制T1強調像(別冊 No. 13C)及び頭頸部PET/CTの冠状断像(別冊 No. 13D)を別に示す。

最も適切な治療法はどれか。

- a 放射線治療
- b 舌全摘出術
- c 抗癌化学療法
- d レーザー蒸散術
- e 舌・口腔底切除術

別 冊
No. 13 A、B、C、D

48 80歳の男性。発熱と食欲低下とを主訴に来院した。半年前から食事にむせることがあった。3か月前に発熱で入院しペニシリン系抗菌薬で治癒した。2日前から発熱が出現し食事摂取ができなくなったため受診した。胸部エックス線写真で右下肺野に浸潤影を認め、前回と同じ抗菌薬で軽快した。1年前に脳梗塞の既往がある。

この患者の繰り返す病態の予防に効果が期待できるのはどれか。

- a 口腔ケア
- b 食後の臥位安静
- c 鎮咳薬の服用
- d 向精神薬の服用
- e ヒスタミン H₂ 受容体拮抗薬の服用

49 75歳の男性。乾性咳嗽と発熱とを主訴に来院した。5日前に湿性咳嗽、喀痰および発熱が生じたため自宅近くの診療所を受診し、非ステロイド性抗炎症薬と抗菌薬とを5日分処方された。内服3日目には解熱したが5日目に乾性咳嗽と発熱とが出現したため再び診療所を受診し、胸部エックス線写真で異常を認めため紹介されて受診した。身長165 cm、体重63 kg。体温37.3℃。脈拍64/分、整。血圧132/64 mmHg。呼吸数20/分。咽頭に発赤を認めない。頸静脈の怒張を認めない。心音に異常を認めない。両側にfine cracklesを聴取する。下腿に浮腫を認めない。血液所見：赤血球376万、Hb13.7 g/dL、Ht35%、白血球10,100(桿状核好中球4%、分葉核好中球76%、好酸球3%、好塩基球0%、単球5%、リンパ球12%)、血小板35万。血液生化学所見：LD386 IU/L(基準176~353)、尿素窒素14 mg/dL、クレアチニン0.8 mg/dL、血糖98 mg/dL、HbA1c6.1%(基準4.6~6.2)、脳性ナトリウム利尿ペプチド(BNP)23.9 pg/mL(基準18.4以下)、KL-6632 U/mL(基準500未満)。免疫血清学所見：CRP5.0 mg/dL、 β -D-グルカン4 pg/mL未満(基準10以下)、サイトメガロウイルス抗原陰性。動脈血ガス分析(room air)：pH7.43、PaCO₂36 Torr、PaO₂69 Torr、HCO₃⁻23 mEq/L。気管支肺胞洗浄液所見：細胞数 3.5×10^6 /mL(肺胞マクロファージ12%、リンパ球85%、好中球1%、好酸球2%)。胸部エックス線写真(別冊No.14A)と胸部CT(別冊No.14B)とを別に示す。

最も考えられる疾患はどれか。

- a 薬剤性肺炎
- b 急性左心不全
- c 日和見感染症
- d 特発性肺線維症
- e 急性呼吸促迫症候群

別冊
No. 14 A、B

50 56歳の男性。胸部圧迫感を主訴に来院した。6か月前に肺内転移を伴う肺腺癌と診断され抗癌化学療法を行った。その後、経過観察していたが、2日前から胸部不快感があり次第に胸部圧迫感を伴うようになったため受診した。身長172cm、体重63kg。体温37.3℃。脈拍116/分、整。血圧88/58mmHg。呼吸数24/分。SpO₂94%(room air)。I音とII音が減弱している。呼吸音に異常を認めない。血液所見：赤血球398万、Hb10.9g/dL、Ht33%、白血球4,300、血小板14万。血液生化学所見：総蛋白6.5g/dL、アルブミン3.2g/dL、AST58IU/L、ALT63IU/L、尿素窒素12mg/dL、クレアチニン0.9mg/dL、Na131mEq/L、K4.4mEq/L、Cl97mEq/L、CEA24ng/mL(基準5以下)。CRP2.3mg/dL。胸部エックス線写真(別冊No.15A)と胸部造影CT(別冊No.15B)とを別に示す。

治療として適切なのはどれか。

- a 抗凝固薬投与
- b 心嚢ドレナージ
- c 気管支拡張薬投与
- d 気管支動脈塞栓術
- e 副腎皮質ステロイド投与

別冊
No. 15 A、B

51 16歳の女子。呼吸困難のため搬入された。母親と口論した後に息苦しさで両手足のしびれ感を訴え、次第に増悪するため救急搬送された。意識は清明。身長160 cm、体重52 kg。体温36.4℃。心拍数96/分、整。血圧96/48 mmHg。呼吸数22/分。顔貌は不安様である。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。両手指は硬直している。血液所見：赤血球380万、Hb 13.0 g/dL、Ht 38 %、白血球6,800、血小板25万。

この患者でみられるのはどれか。

- a 右心負荷
- b 肺過膨張
- c SpO₂低下
- d 血清LD高値
- e アルカローシス

52 64歳の男性。2年前に脳梗塞を発症し、左上下肢の完全麻痺で在宅にて療養中である。5年前から心房細動と心不全とに対して内服治療中である。食事は全量摂取するが、時々、食事中に咳き込むことがある。日中は家族の介助により車椅子で移動している。

今後、在宅診療を続ける過程で心不全増悪を示唆する所見でないのはどれか。

- a 体重増加
- b 下腿浮腫
- c 易疲労性
- d 起坐呼吸
- e 吸気性喘鳴(stridor)

53 41歳の男性。労作時息切れを主訴に来院した。2、3か月前から坂道を歩くと息切れを自覚するようになり、1か月前から夜間就眠時にも呼吸困難を自覚するようになり受診した。18歳時に気胸で入院した。父親が心臓病を指摘されている。兄弟が3人おりいずれも高身長である。身長188 cm、体重62 kg。脈拍84/分、整。血圧110/34 mmHg。胸骨左縁第3肋間を最強点とするⅢ/Ⅵの拡張期雑音を聴取する。胸部エックス線写真(別冊 No. 16 A、B)を別に示す。血液生化学検査、呼吸機能検査、心エコー検査および胸部造影CTを予定した。

認められる可能性が高いのはどれか。

- a CRP 高値
- b 僧帽弁逆流
- c 大動脈基部拡大
- d 閉塞性換気障害
- e 肺動脈主幹部拡大

別 冊
No. 16 A、B

54 55歳の男性。全身倦怠感、体重減少および腹痛を主訴に来院した。過敏性腸症候群の診断で5年前から症状に応じて外来診療を受けている。3か月前から全身倦怠感が続き、この3か月で体重が5kg減少した。1か月前から内服を継続していたが右下腹部痛が増悪してきた。4、5日前から仕事への意欲が低下し職場での人間関係がうまくいかなくなったため受診した。喫煙歴と飲酒歴とはない。身長155cm、体重49kg。脈拍84/分、整。血圧100/78mmHg。眼瞼結膜は貧血様である。腹部は平坦、軟で、圧痛を認めない。便通は週3回で硬便であるが、明らかな血便はなく、ほぼ1日中腹痛がある。血液所見：赤血球274万、Hb7.6g/dL、Ht22%、白血球5,400、血小板28万。血液生化学所見：総蛋白6.3g/dL、アルブミン3.6g/dL、総ビリルビン1.0mg/dL、AST21IU/L、ALT11IU/L、LD179IU/L(基準176~353)、ALP227IU/L(基準115~359)、 γ -GTP40IU/L(基準8~50)、尿素窒素17mg/dL、クレアチニン0.9mg/dL。CRP0.1mg/dL。

対応として適切なのはどれか。

- a 精神科医へのコンサルテーション
- b 過敏性腸症候群の治療薬変更
- c 器質的疾患の検索
- d 中心静脈栄養
- e 経過観察

55 7か月の乳児。頻回のけいれん発作を主訴に母親に連れられて来院した。母親の妊娠・分娩経過に異常なく、定頸は5か月であった。6か月ころより首を前に倒すようなけいれん様発作が1日に何度も出現するようになった。身長67.0 cm、体重8.0 kg。体温36.5℃。脈拍116/分、整。血圧80/46 mmHg。呼吸数24/分。SpO₂ 98 % (room air)。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。体幹と殿部とに白斑を5個認める。血液所見：赤血球400万、Hb 10.5 g/dL、Ht 38 %、白血球10,000、血小板25万。頭部単純CTで脳室周囲の石灰化像を認める。

最も考えられるのはどれか。

- a 結節性紅斑
- b 結節性硬化症
- c Sturge-Weber 病
- d von Hippel-Lindau 病
- e Werdnig-Hoffmann 病

56 68歳の男性。左下肢の紫斑を主訴に来院した。2週前から左下肢に紫斑が出現し徐々に拡大した。1週前から左下肢に疼痛も自覚するようになったため受診した。これまでに出血症状の既往はない。意識は清明。体温36.4℃。血圧154/88 mmHg。腹部は平坦、軟で、圧痛や抵抗を認めない。血液所見：赤血球210万、Hb 6.8 g/dL、Ht 20%、白血球6,400(桿状核好中球6%、分葉核好中球54%、好酸球2%、単球6%、リンパ球32%)、血小板30万、出血時間3分20秒(基準7分以下)、PT 90%(基準80~120)、APTT 64.7秒(基準対照32.2)、血漿フィブリノゲン256 mg/dL(基準200~400)、血清FDP 4 μg/mL(基準10以下)。凝固因子検査の結果は第Ⅷ因子活性6%(基準78~165)、第Ⅸ因子活性92%(基準67~152)、von Willebrand因子活性は正常であった。左大腿から膝関節部内側の写真(別冊 No. 17)を別に示す。最も考えられるのはどれか。

- a 血友病 A
- b 血友病 B
- c 後天性血友病
- d 播種性血管内凝固(DIC)
- e 特発性血小板減少性紫斑病

別 冊
No. 17

57 58歳の男性。発熱、皮疹および関節痛を主訴に来院した。14日前に急性腰痛症のため自宅近くの診療所で非ステロイド性抗炎症薬を処方され服用していた。2日前から発熱、皮疹および関節痛が出現し増悪してきたため受診した。既往歴に特記すべきことはない。体温 37.3℃、脈拍 84/分、整。血圧 138/86 mmHg。全身に紅斑性丘疹を播種状に認める。両側の肩関節、肘関節および膝関節に疼痛と腫脹とを認める。尿所見：蛋白(±)、糖(-)、潜血(±)、沈渣に赤血球 1~4/1 視野、白血球 5~9/1 視野。 β_2 -マイクログロブリン 54,630 $\mu\text{g/L}$ (基準 200 以下)。血液所見：赤血球 350 万、Hb 10.8 g/dL、Ht 32%、白血球 9,600(分葉核好中球 49%、好酸球 24%、好塩基球 1%、単球 1%、リンパ球 25%)、血小板 34 万。血液生化学所見：総蛋白 7.0 g/dL、アルブミン 3.8 g/dL、IgG 1,410 mg/dL(基準 960~1,960)、IgA 200 mg/dL(基準 110~410)、IgE 320 IU/mL(基準 250 未満)、尿素窒素 24 mg/dL、クレアチニン 1.6 mg/dL、HbA1c 5.4%(基準 4.6~6.2)。腎生検のPAS染色標本(別冊 No. 18)を別に示す。蛍光抗体法では糸球体に免疫グロブリンの沈着を認めない。

診断はどれか。

- a 悪性腎硬化症
- b 急性間質性腎炎
- c 紫斑病性腎炎
- d 糖尿病腎症
- e 膜性腎症

別冊
No. 18

58 48歳の女性。2回経妊2回経産婦。月経痛を主訴に来院した。5年前から子宮筋腫を指摘されている。最近、月経時の下腹部痛が強くなったため受診した。月経周期は26日型、整。持続10日間。血液所見：赤血球340万、Hb 6.0 g/dL、Ht 26%、白血球4,200、血小板33万。骨盤部MRIのT2強調矢状断像(別冊 No. 19)を別に示す。子宮摘出手術を行うこととした。

それまでの管理として投与すべきでないのはどれか。

- a 鉄 剤
- b 止血薬
- c 鎮痛薬
- d エストロゲン
- e GnRH アゴニスト

別 冊

No. 19

59 30歳の男性。挙児希望を主訴に来院した。結婚後2年間、排卵日に性交渉をもったが妻は妊娠しなかった。28歳の妻は産婦人科を受診し異常を指摘されていない。腹部の視診と触診で異常を認めない。外陰部の触診で両側精管に異常を認めない。血液生化学所見：LH 3.2 mIU/mL(基準1.8~5.0)、FSH 23.3 mIU/mL(基準2.0~8.0)、テストステロン 285 ng/dL(基準201~750)。染色体検査は46,XYであった。精巣容積は両側ともに6 mL(基準10~14)。精液検査で精液中に精子を認めない。精巣生検において精巣内に運動精子をわずかに認める。

この患者について正しいのはどれか。

- a 乏精子症に分類される。
- b Klinefelter 症候群である。
- c 精管の閉塞の可能性が高い。
- d 体外受精・胚移植の適応がある。
- e ゴナドトロピン補充療法が奏功する。

60 30歳の女性。眼瞼下垂を主訴に来院した。20歳ころから両まぶたが下がってきたことと両側の難聴とを自覚していたが、最近、さらに物が見にくくなったため受診した。意識は清明。身長144 cm、体重36 kg。脈拍80/分、整。血圧112/68 mmHg。両側の眼瞼下垂を認める。眼球は正中に固定し、眼球頭反射を認めない。両側の高度感音難聴を認める。徒手筋力テストで四肢の近位筋は4に低下している。CK 190 IU/L(基準30~140)。右大腿四頭筋で施行した筋生検の Gomori-trichrome 染色標本(別冊 No. 20)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 皮膚筋炎
- b 重症筋無力症
- c 進行性核上性麻痺
- d ミトコンドリア脳筋症
- e 筋強直性ジストロフィー

別 冊
No. 20

61 6歳の男児。2時間前に公園の遊具から転落して右肘を打って受傷したため搬入された。母親の話では受傷直後は指を動かしていたとのことであるが、次第に指の動きが少なくなり救急搬送された。既往歴に特記すべきことはない。脈拍 92/分、整。血圧 112/68 mmHg。右上肢を痛がり動かさない。痛みが強く泣き止まず指を全く動かそうとしない。右肘から前腕近位は腫脹が強く、右橈骨動脈は触知できるが左側に比べると弱い。右手指を他動的に伸展させようとするとう疼痛が増強する。感覚に関する検査は施行できなかった。右上肢の写真(別冊 No. 21 A)と肘部エックス線写真(別冊 No. 21 B、C)を別に示す。

次に行うべき検査はどれか。

- a 動脈造影
- b 右肘部 CT
- c 右肘部 MRI
- d 区画内圧測定
- e 前腕周囲径計測

別 冊

No. 21 A、B、C

62 56歳の女性。全身倦怠感を主訴に来院した。2週間前から全身倦怠感を自覚し徐々に食欲も低下したため受診した。体温37.3℃。脈拍72/分、整。血圧118/74 mmHg。呼吸数12/分。眼球結膜に軽度の黄染を認める。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知せず、圧痛を認めない。血液所見：赤血球411万、Hb13.2 g/dL、Ht39%、白血球12,200(桿状核好中球29%、分葉核好中球42%、好酸球1%、好塩基球1%、単球7%、リンパ球20%)、血小板24万、PT72%(基準80~120)。血液生化学所見：総蛋白7.1 g/dL、アルブミン3.6 g/dL、総ビリルビン5.7 mg/dL、直接ビリルビン4.8 mg/dL、AST303 IU/L、ALT211 IU/L、LD597 IU/L(基準176~353)、ALP683 IU/L(基準115~359)、 γ -GTP432 IU/L(基準8~50)、アミラーゼ96 IU/L(基準37~160)、尿素窒素12 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、血糖99 mg/dL、Na139 mEq/L、K4.4 mEq/L、Cl98 mEq/L。CRP2.0 mg/dL。次に行うべき検査はどれか。

- a 肝生検
- b 腹部造影CT
- c 腹部造影MRI
- d 腹部超音波検査
- e 内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)

63 9歳の男児。遺伝子診断を希望した両親に連れられて来院した。3歳ころに歩容異常と床からの立ち上り困難とに気付かれ筋ジストロフィーと診断された。歩行障害は次第に進行し、かろうじて支え立ちができる程度となった。両親は新聞報道で筋ジストロフィーの遺伝子治療の臨床試験が始まることを知り、事前に必要な検査を希望している。頭部の筋は正常で舌は大きい。四肢体幹筋は萎縮しており、徒手筋力テストで下肢近位筋が2、遠位筋が4である。腱反射は消失している。白血球からDNAを抽出し、ジストロフィン遺伝子の複数のエクソンを同時にPCR法で増幅してアガロースゲル電気泳動した。結果の一部(別冊 No. 22)を別に示す。矢印で所見を示す。

診断はどれか。

- a 筋強直性ジストロフィー
- b 肢帯型筋ジストロフィー
- c Duchenne 型筋ジストロフィー
- d 福山型先天性筋ジストロフィー
- e 顔面肩甲上腕型筋ジストロフィー

別 冊

No. 22

64 1歳1か月の男児。体重増加不良、筋力低下および発達の遅れから先天代謝異常が疑われ精査のため母親に連れられて来院した。寝返りはできず、呼吸器感染症を繰り返している。血清セルロプラスミン値は低値である。

身体所見で認められるのはどれか。

- a 肝脾腫
- b 頭囲拡大
- c 毛髪の異常
- d Kayser-Fleischer 輪
- e 桜実紅斑(cherry-red spot)

65 32歳の男性。急に身体に力が入らなくなったため救急搬送された。過去にも2、3度似たようなエピソードがあったが自然軽快したためそのままにしていた。意識は清明。脈拍84/分、整。血圧200/110 mmHg。呼吸数16/分。近位筋に強い全身筋力低下があり起きあがれない。体型はやや女性的で、幼いころは女兒とよく間違われたという。血液生化学所見：Na 146 mEq/L、K 1.8 mEq/L、Cl 104 mEq/L。動脈血ガス分析(room air)：pH 7.53、PaCO₂ 43 Torr、PaO₂ 87 Torr、HCO₃⁻ 35 mEq/L。カリウム含有の補液治療を受け、動けるようになった。

最も考えられるのはどれか。

- a Basedow 病
- b Klinefelter 症候群
- c アンドロゲン不応症
- d 原発性アルドステロン症
- e 先天性副腎皮質過形成(17 α -hydroxylase 欠損症)

66 52歳の男性。胸やけを主訴に来院した。半年前から食後に約30分続く胸やけがあり1か月前から増悪してきたため受診した。数年前から寒冷時に指が白くなることに気付いていた。1年前から両手指、手背および前腕の皮膚がつまめなくなり、両手の指腹に小潰瘍を認めていた。手の写真(別冊 No. 23)を別に示す。

最も考えられる疾患はどれか。

- a ペラグラ
- b 結節性多発動脈炎
- c クリオグロブリン血症
- d 全身性硬化症〈強皮症〉
- e 全身性エリテマトーデス〈SLE〉

別 冊

No. 23

67 7か月の乳児。発熱のため母親に連れられて来院した。2日前の昼過ぎから発熱があり就寝前の体温は39.0℃であった。昨日も38.9℃の発熱があったが他に目立った症状はなかった。食欲は良好で、普段より軟らかい便が2回あった。元気に泣いている。体重6.5 kg。体温39.1℃。脈拍148/分、整。SpO₂99 % (room air)。眼球結膜に充血を認めない。口蓋垂近くの軟口蓋に紅斑を認める。口蓋扁桃に腫脹や白苔を認めない。頸部リンパ節を触知しない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。皮疹を認めない。尿所見に異常を認めない。血液所見：赤血球466万、Hb12.9 g/dL、Ht42 %、白血球3,500、血小板18万。CRP0.5 mg/dL。特に加療することなく経過観察としたところ、受診翌日の体温は36.6℃で腹部に皮疹が出現した。

この患児で注意すべき合併症はどれか。

- a 難聴
- b 急性脳症
- c 急性小脳失調症
- d 亜急性硬化性全脳炎
- e 特発性血小板減少性紫斑病

68 57歳の女性。全身性エリテマトーデス〈SLE〉の治療のため入院中である。6週前に副腎皮質ステロイドとシクロホスファミドとの点滴を受け、現在はプレドニゾン 40 mg/日とプロトンポンプ阻害薬とを内服している。3日前から腹痛と下痢とが続いている。意識は清明。体温 37.6℃。脈拍 96/分、整。血圧 140/80 mmHg。呼吸数 18/分。口腔内に異常を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は膨満し、臍部を中心に強い圧痛がある。筋性防御はない。肝・脾を触知しない。原因検索のため行った下部消化管内視鏡像(別冊 No. 24 A、B)と粘膜生検の H-E 染色標本(別冊 No. 24 C)とを別に示す。

腹痛と下痢の原因として最も考えられるのはどれか。

- a サイトメガロウイルス
- b 黄色ブドウ球菌
- c アスペルギルス
- d ノカルジア
- e カンジダ

別冊
No. 24 A、B、C

69 75歳の女性。意識混濁のため搬入された。4か月前から易怒性、興奮および不眠が出現し、健忘が急速に進行した。1か月前から床上生活となり、幻視も出現して意思疎通が困難となった。昨日から意識が混濁し回復しないため救急搬送された。海外渡航歴、輸血歴および手術歴はない。意識レベルはJCS I-3。開瞼しているが眼球は浮動しており、追視せず意思疎通は困難である。身長155 cm、体重58 kg。体温36.2℃。脈拍60/分、整。血圧112/68 mmHg。呼吸数20/分。四肢に筋強剛を認め、両上肢と左下肢とにピクつくような素早い不随意運動を周期性に認める。腱反射は全般に亢進しているが、Babinski徴候は陰性である。尿所見、血液所見および血液生化学所見に異常を認めない。頭部MRIの拡散強調像(別冊 No. 25)を別に示す。

この患者における感染防御で最も注意すべきなのはどれか。

- a 脳波検査
- b 喀痰培養
- c 脳脊髄液検査
- d 動脈血ガス分析
- e 上部消化管内視鏡検査

別 冊
No. 25

70 30歳の男性。大企業の営業職。気分が晴れず職場に行くことができないことを主訴に妻に付き添われて来院した。3か月前に商品納入のトラブルで取引先の会社の担当者に罵倒され、その後、自責の念が強くなり、抑うつ気分、早朝覚醒および倦怠感が続き、3日前から会社に行けないと休むようになった。2週前の会社の健康診断では異常を指摘されていない。身体所見、臨床検査および画像検査で異常を認めない。

抑うつへの治療とともにとるべき対応として適切なのはどれか。

- a 労働災害の認定をする。
- b 労働基準監督署に連絡する。
- c 直ちに転職することを勧める。
- d 産業医にも相談することを勧める。
- e 取引先の産業医に状況を確認する。

71 78歳の男性。気分不良のため搬入された。3年前から慢性腎不全のため血液透析を受けている。昨日午後の透析後、発熱と気分不良とを認め、安静にしていたが改善しないため今朝8時に救急搬送された。身長158cm、体重55kg。体温37.5℃。脈拍140/分、整。血圧86/56mmHg。右殿部から大腿にかけて発赤と腫脹とを認め、会陰部右側と陰囊とに潰瘍があり、悪臭のある膿が出ている。血液所見：赤血球378万、Hb11.8g/dL、Ht36%、白血球16,900(桿状核好中球36%、分葉核好中球60%)、血小板14万。血液生化学所見：総蛋白6.1g/dL、アルブミン3.0g/dL、AST14IU/L、ALT8IU/L、LD245IU/L(基準176~353)、尿素窒素45mg/dL、クレアチニン7.8mg/dL、Na137mEq/L、K3.9mEq/L、Cl100mEq/L、プロカカルシトニン23.4ng/mL(基準0.05以下)。CRP21mg/dL。外陰部の写真(別冊No.26A)と腹部・骨盤部単純CT(別冊No.26B)とを別に示す。

輸液による循環管理と抗菌薬全身投与とともに、早期に行うべき治療はどれか。

- a 抗真菌薬投与
- b 創の縫合閉鎖
- c 切開排膿ドレナージ
- d 免疫グロブリン製剤投与
- e 副腎皮質ステロイド投与

別冊
No. 26 A、B

72 75歳の女性。顔面紅潮を主訴に来院した。半年前から家族に顔が赤くなったと言われるようになった。めまいや頭重感を時々自覚するようになったため受診した。喫煙歴はない。身長145 cm、体重50 kg。体温36.5℃。脈拍68/分、整。血圧158/90 mmHg。顔面は紅潮している。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。血液所見：赤血球773万、Hb 19.3 g/dL、Ht 61%、白血球15,320(桿状核好中球20%、分葉核好中球55%、好酸球2%、単球6%、リンパ球17%)、血小板59万、好中球アルカリフォスファターゼスコア440(基準120~320)。血液生化学所見：総蛋白6.6 g/dL、総ビリルビン0.5 mg/dL、AST 20 IU/L、ALT 25 IU/L、LD 471 IU/L(基準176~353)、尿素窒素18 mg/dL、クレアチニン0.6 mg/dL、尿酸8.0 mg/dL、Fe 29 μg/dL、ビタミンB₁₂ 1,200 pg/mL(基準250~950)、エリスロポエチン2 mIU/mL(基準8~36)。CRP 0.1 mg/dL。腹部超音波像で軽度の脾腫を認める。骨髓穿刺検査では有核細胞数72.5万で、赤芽球、顆粒球および巨核球の3血球系統が増加している。

今後の治療として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 瀉血
- b 鉄剤投与
- c 造血幹細胞移植
- d 低用量アスピリン投与
- e 多剤併用抗癌化学療法

73 70歳の女性。下腿浮腫を主訴に来院した。7年前から健康診断で蛋白尿を指摘されていたが医療機関を受診しなかった。5年前から両下肢に浮腫が出現し、増悪と軽快とを繰り返していた。2週前から浮腫が高度となり歩行障害をきたしたため受診した。身長158 cm、体重60 kg。体温37.6℃。脈拍64/分、整。血圧152/90 mmHg。呼吸数16/分。顔面は浮腫状である。心音と呼吸音とに異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。脛骨前面に圧痕を残す浮腫を認める。尿所見：蛋白3+、糖(-)、潜血(±)。血液所見：赤血球486万、Hb12.8 g/dL、Ht38%、白血球6,200、血小板34万。血液生化学所見：総蛋白4.8 g/dL、アルブミン2.8 g/dL、尿素窒素20 mg/dL、クレアチニン0.7 mg/dL、Na135 mEq/L、K4.2 mEq/L、Cl98 mEq/L。腎生検のPAM染色標本(別冊 No. 27A)、蛍光抗体IgG染色標本(別冊 No. 27B)及び電子顕微鏡写真(別冊 No. 27C)を別に示す。

この患者で検索すべきなのはどれか。2つ選べ。

- a 悪性腫瘍
- b 感音難聴
- c 巨舌
- d 脳動脈瘤
- e B型肝炎ウイルス感染

別冊
No. 27 A、B、C

74 37歳の男性。左下腹部痛を主訴に来院した。深夜、就寝中に突然の左下腹部痛で目が覚めた。痛みは急激に増強し悪心と嘔吐とが出現したため受診した。意識は清明。体温 36.3℃。血圧 158/94 mmHg。腹部に反跳痛を認めない。左側の肋骨脊柱角に叩打痛を認める。尿所見：蛋白 1 +、糖(-)、潜血 3 +、沈渣に赤血球 15～30/1視野、白血球 1～5/1視野。腹部超音波検査では左腎盂に軽度の拡張を認める以外には異常を認めない。腹部エックス線写真正面像で第3腰椎の左横突起の外側に 3×2 mm の石灰化を認める。非ステロイド性抗炎症薬の坐剤を挿入して症状は軽快した。

今後の対応についての患者への説明として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a 「尿酸が主成分なので薬を処方しましょう」
- b 「水分を十分摂取して尿量を増やしてください」
- c 「また痛みが出てくるようなら手術をしましょう」
- d 「痛みがなくても排石されるまで自動車の運転は危険です」
- e 「左の尿管が閉塞しているのでその尿管に細いチューブを留置します」

75 31歳の男性。右陰嚢腫大を主訴に来院した。1年前から右陰嚢腫大に気付いていたが、疼痛を自覚しないため様子を見ていた。1か月前から陰嚢腫大が増悪してきたため受診した。身長172cm、体重60kg。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触知しない。外陰部では右精巣が小児頭大に腫大しているが圧痛を認めない。血液生化学所見：LD 658 IU/L(基準176~353)、hCG 12 mIU/mL、 α -フェトプロテイン〈AFP〉64 ng/mL(基準20以下)。胸部CTと頭部MRIとに異常を認めない。腹部造影CT(別冊No. 28)を別に示す。

この患者について正しいのはどれか。2つ選べ。

- a 右陰嚢に透光性を認める。
- b 所属リンパ節転移を認める。
- c 5年生存率は50%と予想される。
- d 精巣の針生検で組織診断を決定する。
- e 予測される組織型は非セミノーマである。

別冊

No. 28

76 60歳の女性。呼吸困難を主訴に来院した。3週前から乾性咳嗽が、2週前から血痰が出現した。昨日から38℃台の発熱と呼吸困難とを生じたため受診した。意識は清明。身長150cm、体重48kg。体温37.4℃。脈拍92/分、整。血圧124/86mmHg。呼吸数24/分。SpO₂90%(room air)。眼瞼結膜は貧血様である。心尖部にII/VIの汎〈全〉収縮期雑音を聴取する。右胸部と右背部とにfine cracklesを聴取する。尿所見：比重1.011、蛋白1+、潜血2+。血液所見：赤血球280万、Hb8.2g/dL、Ht28%、白血球13,600(桿状核好中球10%、分葉核好中球81%、好酸球1%、単球3%、リンパ球5%)、血小板36万。血液生化学所見：アルブミン3.3g/dL、AST50IU/L、ALT30IU/L、LD710IU/L(基準176~353)、尿素窒素16mg/dL、クレアチニン0.6mg/dL。免疫血清学所見：CRP16mg/dL、抗核抗体160倍(基準20以下)、MPO-ANCA300EU/mL(基準20未満)。胸部CT(別冊No.29)を別に示す。

治療として適切なのはどれか。2つ選べ。

- a フロセミド
- b ニトログリセリン
- c シクロホスファミド
- d 副腎皮質ステロイド
- e サラゾスルファピリジン

別冊
No. 29

77 20歳の女性。浮腫を主訴に来院した。2週前から咽頭痛と発熱とがあり自宅近くの診療所を受診し、扁桃の腫大と滲出とが認められたため扁桃炎として治療された。数日前から顔と下肢の浮腫が出現し増悪してきたため診療所を受診し、精査のため紹介されて受診した。これまでに健康診断で異常を指摘されたことはない。脈拍88/分、整。血圧158/74 mmHg。尿所見：蛋白2+、潜血3+。

この患者で認められる可能性が高いのはどれか。2つ選べ。

- a C3低下
- b IgE高値
- c ASO陽性
- d 抗CCP抗体陽性
- e 抗リン脂質抗体陽性

78 42歳の男性。人間ドックの腹部CTで異常を指摘されたため来院した。既往歴に特記すべきことはない。喫煙歴と飲酒歴とはない。身長172 cm、体重75 kg。脈拍76/分、整。血圧142/82 mmHg。身体所見に異常を認めない。血液所見：赤血球420万、Hb 14.4 g/dL、Ht 41 %、白血球8,000(桿状核好中球10 %、分葉核好中球70 %、単球4 %、リンパ球16 %)。血液生化学所見：空腹時血糖102 mg/dL、HbA1c 5.9 % (基準4.6~6.2)、Na 141 mEq/L、K 4.3 mEq/L、Cl 106 mEq/L、ACTH 7 pg/mL未満(基準60以下)、コルチゾール11.8 μg/dL(基準5.2~12.6)、アルドステロン106 pg/mL(基準45~106)、血漿レニン活性2.4 pg/mL/時間(基準1.2~2.5)。尿中メタネフリン0.11 mg/日(基準0.05~0.23)、尿中ノルメタネフリン0.14 mg/日(基準0.07~0.26)。人間ドックの腹部単純CT(別冊 No. 30)を別に示す。

診断に有用な検査はどれか。2つ選べ。

- a 腹部超音波検査
- b 選択的副腎静脈採血
- c カプトプリル負荷試験
- d デキサメタゾン抑制試験
- e ¹³¹I-アドステロールシンチグラフィ

別 冊
No. 30

79 58歳の男性。胸痛を主訴に来院した。1週前、プールで水泳中に締め付けられるような胸痛を初めて自覚した。痛みは数分で消失した。昨日の夕食後に同様の強い症状が出現し、約1時間で改善したためそのまま入眠した。今朝になって心配した家族に連れられて受診した。喫煙は20本/日を38年間。糖尿病にて食事指導と運動指導とを受けている。意識は清明。身長160cm、体重59kg。体温36.3℃。脈拍96/分、整。血圧150/84mmHg。呼吸数16/分。SpO₂98%(room air)。眼瞼結膜に異常を認めない。頸静脈の怒張を認めない。心音と呼吸音とに異常を認めない。血液所見：赤血球430万、Hb14.0g/dL、Ht36%、白血球6,200、血小板22万。血液生化学所見：心筋トロポニンT陽性、CK239IU/L(基準30~140)、CK-MB23IU/L(基準20以下)。胸部エックス線写真で異常を認めない。心電図(別冊No.31A)と冠動脈造影像(別冊No.31B、C)とを別に示す。

治療として適切なのはどれか。3つ選べ。

- a 硝酸薬投与
- b 冠動脈バイパス術
- c ヘパリンの持続静注
- d 経皮的心肺補助(PCPS)の実施
- e t-PA(tissue plasminogen activator)の静脈内投与

別 冊
No. 31 A、B、C

80 66歳の女性。上腹部痛を主訴に来院した。昨日の夕食後から上腹部痛が出現し、本日の昼から増悪してきたため夕方に受診した。高血圧症と脂質異常症とで内服治療中である。身長155 cm、体重58 kg。体温38.2℃。右季肋部に強い圧痛を認めるが、反跳痛はない。血液所見：赤血球448万、Hb13.8 g/dL、Ht37%、白血球15,800、血小板28万。血液生化学所見：総ビリルビン0.9 mg/dL、AST28 IU/L、ALT18 IU/L。CRP9.8 mg/dL。腹部造影CT(別冊 No. 32)を別に示す。

治療として適切なのはどれか。3つ選べ。

- a 抗菌薬投与
- b 経動脈的塞栓術
- c 腹腔鏡下胆嚢摘出術
- d 経皮経肝胆嚢ドレナージ
- e 体外衝撃波結石破碎術(ESWL)

別冊
No. 32

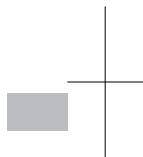
TP01doc-Ior-55

TP01doc-Ior-56

TP01doc-Ior-57

TP01doc-Ior-58

TP01doc-Ior-59



TP01doc-Ior-60

